《書評》

『良い死／唯の生』
立岩真也*著、ちくま学芸文庫、2022 年

香　川　知　晶†

ごく個人的な話から始めることにする。どうも立岩さん（さほど個人的な付き合いがあったわけではないが、他の呼び方ではどれもしっくりこないので、こう呼ばせていただく）の本は、きわめて個人的なことを話したくさせるところがあるようだ。自分を肯定できるし、そうしてもよいと思わせてくれるからかもしれない。ただし、わたしの話は立岩さんの書き物の分からなさに関係する。

立岩さんは 1990 年の共著『生の技法』そして 1997 年の『私的所有論』以降、少なくともこの業界（「どの業界？」と立岩さんには言われそうではあるが）ではずっとスターであり続け、多数の本や文章を発表してきた。特に単著の華々しいデビュー作、『私的所有論』はずいぶん話題となった。とうぜん、わたしも刊行されるとすぐにそのかなり部厚い（立岩さんなら、本書 51 頁にもあるように、本の価格を○○円と具体的にあげて、誰が買うのか分からないような値段と厚さと言いそうな）本を購入した。ところが、その文章が衝撃的に分からなかったのである。

立岩さんの文章の分からなさは、いわゆる難解な文章のそれとは種類が異なるように思われた。言葉が難しいわけではない。むしろ易しい言葉から作られている。にもかかわらず、その文章の少なからぬ部分はどこに着地するのか、どこに着地したのか、わたしにはさっぱり分からなかった。文章の呼吸が呑み込めなかったのである。立岩さんは並みの人間が考える日本語を破壊しているように思われた。

その後も精力的に続けられる立岩さんの仕事は気になって覗いてみるのだが、『私的所有論』の時に受けたインパクトは変わることなく残ることになる。したがって、立岩さんの仕事には、どちらかといえば敬して遠ざけるというふうにならざるをえなかった。

友人に、ほとんどあらゆる分野に深い知識をもち、物事を瞬時に、じつに明晰に解析する博識の知識人の権化のような人がいた。その権化氏と話している時に、立岩さんの仕事が話題になったことがある。そして、陳腐な表現だが、結構、話に花が咲いた。だが、話の最後に友人はややかん高い、明るい声で「立岩の文章は本当のところ、よく分からないのだけどね」と言ったのである。権化氏でもそう思っていたのか。わたしは驚くとともに、なんとなくホッとした。彼は本当のことを言いすぎることが欠点なくらい、何事についても思ったことを正直に言い、そのために誤解を受けることもあるような人だった。ただし、「よく分からない」と言った中身について話す機会はその後

---

* 元立命館大学大学院先端総合学術研究科教授

† 山梨大学名誉教授
villaboiissire@gmail.com

© 立命館大学アジア・日本研究所
『立命館アジア・日本研究学術年報』2024, PRINT ISSN 2435-421X ONLINE ISSN 2435-4228, Vol.5, pp.98-101.

ないままに、年下の正直すぎる友人もまたあっさり亡くなってしまった。

もちろん、立岩さんは、そんなこととは関係なく、どんどん仕事をつづけ、愛読者を増やしているようだった。その人たちは立岩さんの本をどのように読んでいるのだろうか。少し不思議に思われた。

そんなところに、ひょんなことからある学会との関係で友人を介して立岩さんにわたしの推薦書を書いてもらうことになった。4年ほど前の話である。結果的には、立岩さんの推薦が功を奏してしまった。その学会は、その後、立岩さんに「人智を超えたことが起きている」と言わしめる事態に立ち至るのだが、それはまた別の話である。ここで触れたいのは書いてもらった推薦書のことである。それがまた何を書いているのか、見事に分からなかった。その点では『私的所有論』のインパクトを超えるものがあった。

何が書かれてあるのか、推薦書は一切の理解を超越していた。立岩さんは諸般の事情から推薦書なるものを書かざるをえなかったはずで、大いに困ったことだろう。にもかかわらず無理を押して、あっさりと書いてくれた。一切の理解を超越しているのは、今回は皆を煙に巻くのが上策と、立岩さんが判断したということであったのかもしれない。「立岩さん、本当のところはどうだったの」と、聞けないことを心から残念に思う。

そんな超絶理解推薦書のことを、かなり年下の研究者にいささか嘆いた。彼女は立岩さんの文章はよく分からないこともあるという点には一応は賛同してくれた。そのうえで、立岩さんが話している時はいつもとても明快で、よく分かるのだとも付け加えた。なるほど、その通りである。この指摘はわたしにとっては天啓とも思えるものだった。

立岩さんはたしかによく分かる話をする人だった。そのことが逆に文章の分かりにくさを作っているのではないか。やや気取った、訳の分かったような分からないような言い方をすると、立岩さんの文章はエクリチュールの逆襲を再度パロールをもって打ち負かし、浸食し尽くそうとしたものだったのではないか。普通に言えば、その文章は話しているように読めばよく分かるはずだということである。

そう考えて読んでみれば、それまで分からないと思っていたのが嘘のように、よく分かるように思われた。これは多くの立岩さんの愛読者の人たちがごく自然にやっていることで、彼らにとっては当たり前の話にすぎないのかもしれない。その当たり前にたどり着くまでに、わたしは結構時間がかかってしまった。

こうして、ようやく今回のちくま学芸文庫版の『良い死／唯の生』の話になる。今くだくだしく述べた経緯を経て、たどり着いた読み方でいけば、これはじつによく分かる本である。それは本書に講演の筆記といったものが多く収められていることだけによるのではない。その他の、いかにも立岩さんらしい文章もよく分かるのである。

この本は2008年の『良い死』と2009年の『唯の生』を一書としたものである。概要は、この文庫版に附せられた「文庫版への序」（11頁）に端的に示されている。本書の第I部「良い死」は「基本的に考えておくべきことを考え」、第II部「唯の生」は「小松美彦、清水哲郎、小泉義之の論を検討している」。さらに全体の内容を「一番簡単に言うと、『良い死』を追い求めるのはよそう、『唯の生』でいいことにしよう」となる。

本書の要点はごく簡単に言い切ることができる。それなのに、どうして570頁という厚さを必要としたのか。

まず、立岩さんが「誠実で良心的」議論の危険性をよく分かっていたことを指摘しておくべきだろう。たとえば第Ⅰ部の「序章　要約・前書き」（46 ～ 51 頁）で繰り返される「哲学者・倫理学者」の社会参加、生命倫理の現状に関する指摘である。彼らは現場の具体な事例に足をすくわれ、本来の問いを忘れている。その結果が、生命倫理であるとも言える。

いわゆる生命倫理はどのように形成されてきたのか。その出発点には、自分たちの決定を大切にしてほしい、医療の専門家の専制から自らを取り戻したいという、患者たちの切実な思いがあったはずである。そこには「一人ひとりの生活・生存が大切にされてよい」（108 頁）という至極もっともな考え方がある。そこから哲学者・倫理学者たちも参加する議論も生まれ、それがしだいに制度的に定着することになったということだろう。

立岩さんは、そうした制度化が往々にして法律やガイドラインなどの作成に結びつくことを繰り返し指摘する。たしかに、何もないよりは、とりあえずは何らかの「きまり」があった方がよいだろう。しかも、ガイドラインは、それで話は済むはずはないにしても、作らざるをえないのだから、より良いものにする方がよいに決まっている。というわけで、「良識的な人たち」は医療の専門家に積極的に協力しながら、「きまり」作りに邁進する。現場の個別的な事例に特有の事情を知れば知るほど、そこに関わる医療の専門家たちの言うことに対する同調圧力は高まるものである。その結果、精錬されたガイドラインが出来上がる。これは悪いことではないのかもしれない。

しかし、いったん出来上がると、それだけでは話が済まないはずのガイドラインが物事の強固な判断基準へと成り上がる。もちろん、いろいろな具体例への対応を迫られて部分的な修正を重ね、ガイドラインは微に入り細を穿つものとはなるはずである。その結果、ガイドラインに沿うかどうかを判断する新たな専門家が必要となる事態も生じてくる。ここに「生命倫理」は官僚主義的完成形態を迎え、ガイドラインに精通する新たなテクノクラートが生命倫理の専門家と呼ばれることになる。

もちろん、新たな仕事口が生まれ、そこで生計を立てられるというのは慶賀の至りではある。しかし、その何が楽しいのか、さっぱり分からないような仕事にどっぷりと浸かり、嬉々として作業に打ち込む人たちを見ると、余計なお世話ではあるが、「倫理」はどうなったのか、「生命倫理」などと言わないでほしいと言いたくなる。しかし、そうなったのは倫理問題が社会に吸収された結果だとも言える。もはや「それでいいのか」という問いはゴミ箱行きである。といっても、問題は隠されただけで、解決されたわけではない。立岩さんはそうした社会のゴミ箱メカニズムといったものに敏感だったし、その行く末をよく見通していたと思う。問いはそのことを十分、分かったうえで立てられている。立岩さんは問いに応ずるために必要なことを知ろうとし、問いを考え抜こうとしていた。そのことが、この『良い死／唯の生』を読むとよく分かる。

本書の第Ⅰ部は尊厳死・安楽死を肯定する主張を分節化し、縦横に批判する。まず第１章「私の死」は、尊厳死・安楽死肯定論が自分のことは自分で決めるのがよいのだとする考え方に立ち、尊厳死・安楽死を他人に迷惑をかけない自足した行為だとする点を批判する。続く第２章「自然な死、の代わりの自然の受領としての生」では、尊厳死・安楽死言説が単純な「自然対人工」の二項対立図式に立つことが示され、医療技術による延命が不自然だとする言明の奇妙さと終末期医療における自然信仰の虚妄が衝かれる。さらに第３章「犠牲と不足について」は、資源は有限である、つまりは金がないから「無駄」となったら治療をやめましょうという主張を検討する。立岩さんからすると、そうした主張には根拠など見当たらない。つまり、「回復をもたらさなくても、生命・生活の

維持に役立つ処置を否定する理由は何もない」(23 頁)。こうして、「『良い死』を追い求めるのはよそう、『唯の生』でいいことにしよう」と言われるのである。

この第 I 部を読むと、第 1 章・第 2 章と第 3 章で、立岩さんの議論の作り方に大きな違いがあることに気づく。最初の 2 章は「私の死」や「自然な死」をめぐって、「もし A であれば、B と返せるかもしれない」といった調子で仮定法を多用して、非常に慎重な、場合によってはかなり回りくどい形で語り続け、尊厳死思想を論駁していく。それは「金がない」話に対して、「そりゃあ、端的に間違いでしょ」と返していく第 3 章の口調とはきわめて対照的である。

そうなったのは、日本における尊厳死運動が延命絶対主義批判であるとともに、自然な良い死を望む大方の人々の意向に沿うものでもあるからである。つまり、社会批判であるように見える尊厳死運動が、じつは社会の本流を形成しているのである。したがって、尊厳死運動のおかしさを言うことは、この社会がおかしいと言うことにならざるをえない（73 頁)。勢い、議論はさまざまな可能性を考慮し、慎重に言葉を重ねていくことになる。他方、第 3 章の「金がない」という主張も社会の本流ではあるだろう。実際、「金がない」と言われると、それだけで多くの人は黙ってしまう。しかし、その主張は端的な思い込み、間違いである。第 3 章はそれを幾つかの論点から指摘する。こうして、第 I 部の前半と後半の論調はガラッと変わるのである。

続く第 II 部「唯の生」は、「文庫版への序」にもあるように、小松美彦、清水哲郎、小泉義之の論を検討している。それを読むと、自己決定をめぐる立岩さんの立場がよく分かる。立岩さんは、自己決定を理由とする尊厳死肯定論・尊厳死合法化論を退けるからといって、第 I 部の前半から分かるように、自己決定の大切さをすべて手放すわけではない。その点は、第 II 部の最初に置かれた小松と清水の論の検討によく示されている。立岩さんは、対立するように見える二人の立場が、最終的にある種の共同（体）による決定の重視といった点で融和的であることを示し、疑問符をつけている。他方、小泉の論には、その言い切る力に強く同意しながら、さらなる論の展開を迫っている。いずれの指摘もとても興味深いし、本の読み方のあるべき姿が示されていると思う。

本書は死をテーマとしているとはいっても、暗いわけではまったくない。むしろここで語られるのは、願わしい変化を求める希望とそのための手がかりである。そこには、本書も触れるように（たとえば、28 頁以下)、ほんの数人であっても必要なことを言い続け、働きかけ、成果を得てきた障害者や難病の人たちの運動経験が生きている。その意味でも本書は立岩さんらしさに溢れている。歓待すべき文庫版の登場である。